

井原トリノス1号墳の墳丘測量成果

—井原トリノス古墳群の盟主墳の測量調査—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

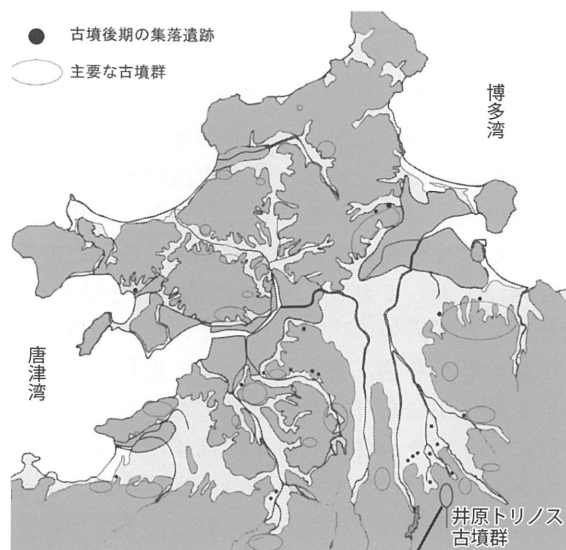
1. はじめに

井原トリノス古墳群は、怡土平野を北に見下ろす井原山（標高984m）の北麓に所在する後期古墳群である。

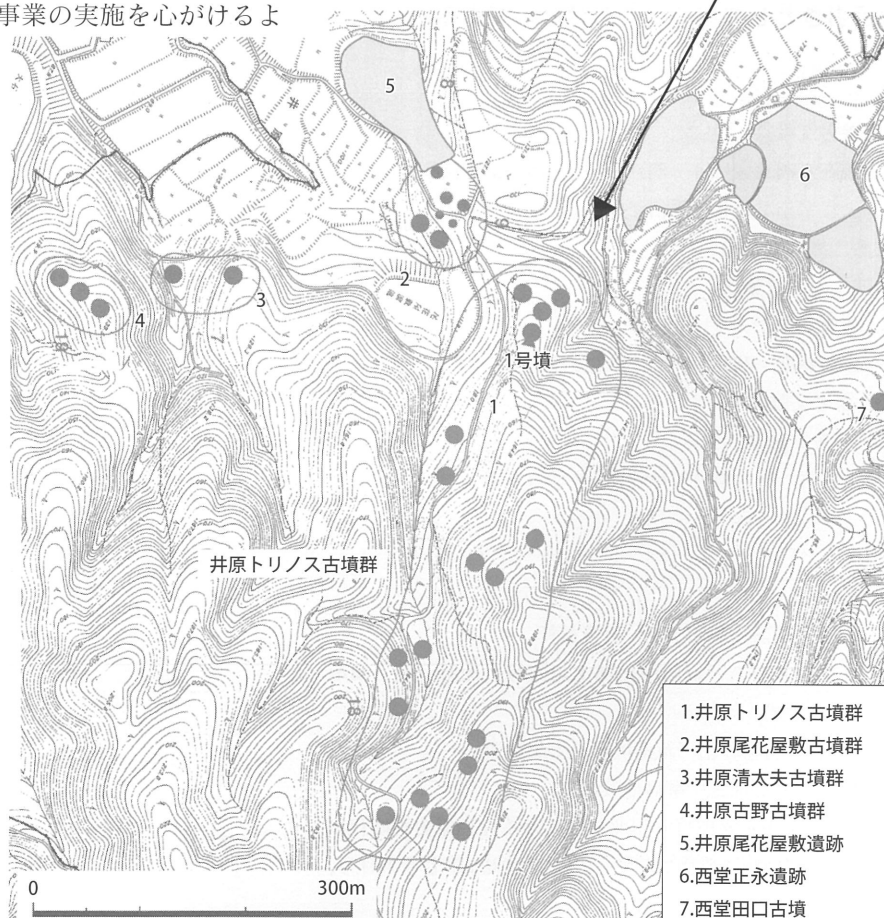
この古墳群を含む周辺一帯において、ゴルフ場の開発計画が持ち上がったのは平成5年にさかのぼる。市教育委員会では、事前の分布調査を行い、計画地内に総数35基の古墳をはじめとする遺跡の存在を確認した（註1）が、なかでも当該古墳群は、計画地内で最も多くの古墳が集中して分布し、その中に前方後円墳も含まれること（第1図）、また、6世紀中葉から7世紀にかけて継続的に古墳が築造されており、律令期前夜の当該地域の歴史を考察する上で重要な情報を含むと考えられることなどから、開発の設計段階において、当該古墳群の保存を前提とした事業の実施を心がけるよう開発側に指導し、その結果、古墳の集中する谷間地区を中心とした一帯の現状を大きく改変することなく保存することで合意した。

その後、当該地域を含む埋蔵文化財の分布調査を実施する機会を得たが、その取り組みの中で、古墳群中の盟主墳と位置付けた1号墳について、墳丘の測量を行った。

実測図については、既に公表した（註2）が、詳細について説明することはできなかったもので、古墳群の概要とともに本項で改めて報告することとした。



井原トリノス古墳群の位置



第1図 井原トリノス古墳群の位置（上）と周辺の古墳の分布（1/5,000）

2. 古墳群の概況 (第1図)

井原トリノス古墳群は、怡土平野南部の標高110m～210mを測る山中に位置する。怡土平野を北流する河原川の支流である赤崎川を北に臨み、南北600m、東西300mほどの尾根の稜線から谷間にかけての一带に築かれた古墳群である。

現在までに20基が確認されているが、古墳群中を南北に貫通する林道の造成などにより破壊されたもの、あるいは斜面に埋没したものも少なくなく存在すると考えられる。

また、古墳の大半は小字トリノス地内に分布するため、古墳群の名称に用いたが、北に隣接する小字「尾花屋敷」においても7基の古墳が群集しており(第1図)、立地的にはこれらも当該古墳群に含めて考える必要があると考えられる。このため、古墳群を構成する古墳の数はこれよりも増加し、実数的には40基近くになることも想定され、この解明は将来の調査研究に委ねられている。

古墳群の変遷については、細かな検討は行なわれてはいないが、基本的には尾根線付近に築かれた古墳の石室が墳丘高が高く小ぶりの転石を腰石に据えている傾向が強く、これらが古い様相と捉え、また、これに対し斜面の中位～下方に築かれた古墳は使用石材が大ぶりとなり、これに反して墳丘は小形化し、それと共に石室が半ば半ば地下に埋設される傾向が認められ、これらを新しい様



写真1 尾花屋敷古墳群の調査風景(北から 矢印下が井原トリノス1号墳)

相ととらえ、古墳の築造順は概ね尾根線から谷間へと変移していったものと推定している。

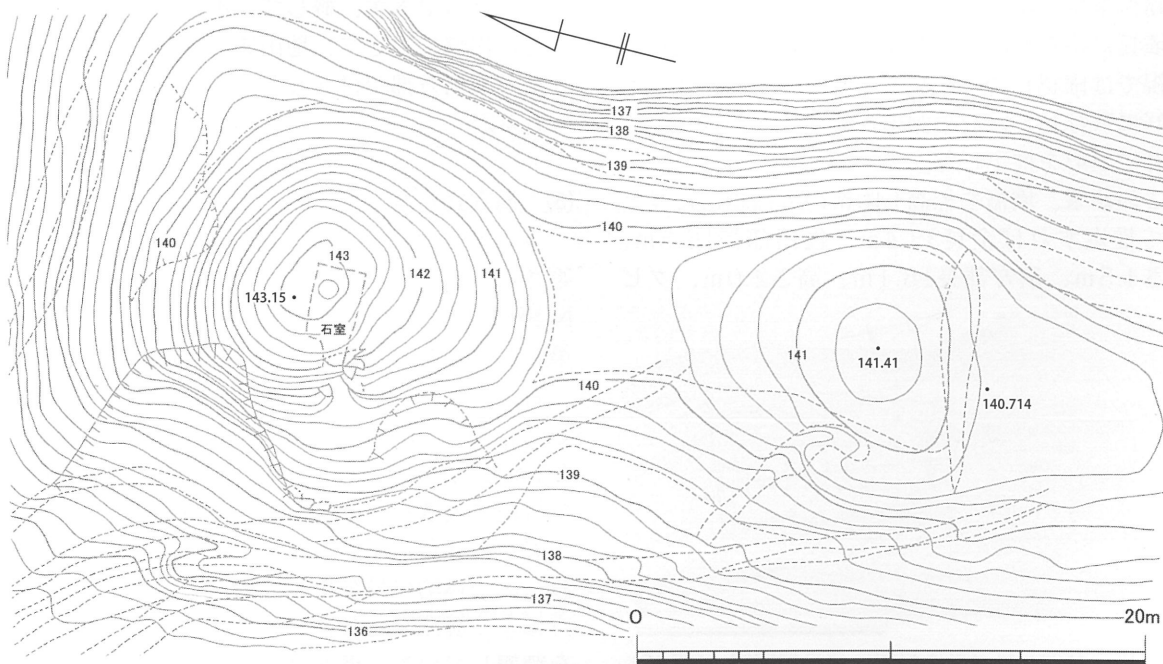
また、その空間的な分布状況から4～5つの支群によって構成されているものと考えられる(第1図点線)。

3. 井原トリノス1号墳 (第2図)

(1) 立地

測量調査を実施した1号墳は、同古墳群の尾根筋に築かれた古墳のなかでは北端に位置し、そこから北に見下ろすと周辺と比べて怡土平野の眺望が最も優れたロケーションに築かれている。

また、後円部下の北斜面の中腹に近接して3基の小円墳が寄り添うように築かれており、他の古墳の立地環境、周辺古墳との配置において大きく



第2図 井原トリノス1号墳の墳丘測量図(1/300)



写真2 井原トリノス1号墳前方部から後円部をのぞむ

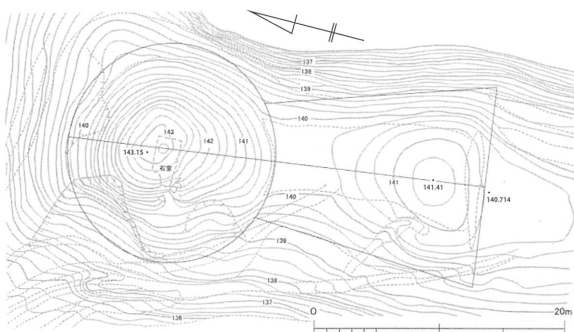
異なった様相を見せている。前方後円墳として築造された首長墳としての意義も考慮すると、当該古墳群における盟主的な位置づけを持って築造されたものと考えられる。

(2) 墳丘測量の結果

古墳群では、墳丘が後世に大破したものが多い中、横穴式石室を含めて良好に残存する数少ない古墳の一つであった。しかし、古墳が築かれた尾根は元来痩せ細った形状であるため、墳丘の両側面下の勾配はかなり急で、前方後円墳を築造するうえではやや狭小の感が否めない。

また、後円部の西裾では谷から尾根線に延びた林務作業用の小道があったり、一部土砂崩壊により墳丘に挟られたような跡も認められ、墳丘裾は目視では確認しづらい状況にもあったが、比較的良く残存していた東側墳丘の傾斜変換線などを参考に墳形を推定した。

この結果、墳裾を標高140mの等高線あたりとして推定すれば全長33.4m、後円部径16.5m、高さ4.5m、前方部長18.1m、高さ2.0m、クビ



第3図 井原トリノス1号墳 墳形推定図 (1/600)



写真3 井原トリノス1号墳の後円部墳頂から平坦な前方部をのぞむ

レ部幅9.3mほどと推定した(第3図)。

測量では、墳丘の明確な段築は確認することができなかったことから、前方部、後円部ともに1段築成であった可能性が高いと考えられる。また、表面観察の限りでは葺石と考えられる塊石や埴輪等も確認できなかった。

墳丘は、尾根の頂上部を地山整形して墳丘下部を構築した後、特に後円部は横穴式石室の構築と並行して盛土を施していったものであろう。

また、現状では前方部墳端裾と前方頂部との比高差は80cmほどしかないが、これは長年の土砂の流失と墳丘裾の埋没によるものと考えられる。しかし、それでもなお高く盛り上がる墳丘を想定することもできず、概して、円錐状に高く盛土された後円部に対して、地山成形を基調に低平で長く伸びる前方部が付されたとみるのが妥当と考えられる。

(3) 横穴式石室

本古墳の埋葬施設は、後円部墳丘内中央に構築された横穴式石室である。石室の主軸方向は、N-89°-Wで、墳丘の主軸から概ね直交方向に構築し西に向かって開口している(写真4)。

石室は単室の横穴式石室で、床面は土砂が流入しているが、玄室の平面プランは長さ2.9m、幅1.8mを測り、石室の規模としては当該地において特段に大きなものとはいえない。

玄門から羨道部にかけて、花崗岩の転石を横積みし、一体的に構築する構築パターンは、糸島地方に多く展開した6世紀の横穴式石室の基本構造を踏襲している。壁面は、中位から天井にむかっ

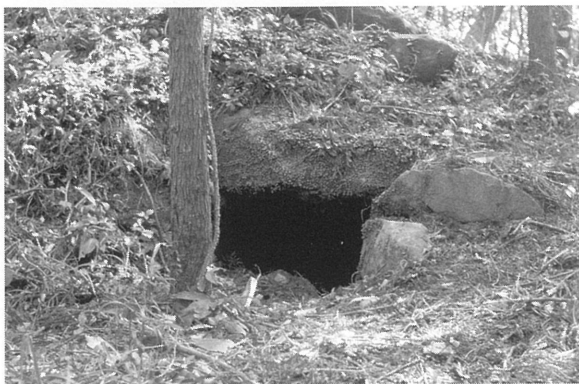


写真4 井原トリノス1号墳の石室開口状況

て緩やかに持ち送り、天井石は花崗岩の平石2石を並べて架構している。

4. おわりに

糸島地方、とりわけ旧怡土郡域の後期群集墳では、本古墳と同様に古墳群における盟主的な位置づけを想定しうる小型前方後円墳が多く築かれているのが特徴である。

現在把握しているものとして谷上古墳（37m、9期）、女原C-14号墳（30m？10期？）、飯氏B-14号墳（24.5m、10期古相）、王丸浦ノ田B-1号墳（23m、10期古相）、山犬の尾C-1号墳（22m、10期古相）、砂魚塚古墳（23m、9期）、屋敷1号墳（20m、10期古墳）、真方C-1号墳（16m・10期）などを上げることができ、その数は8基にのぼる。

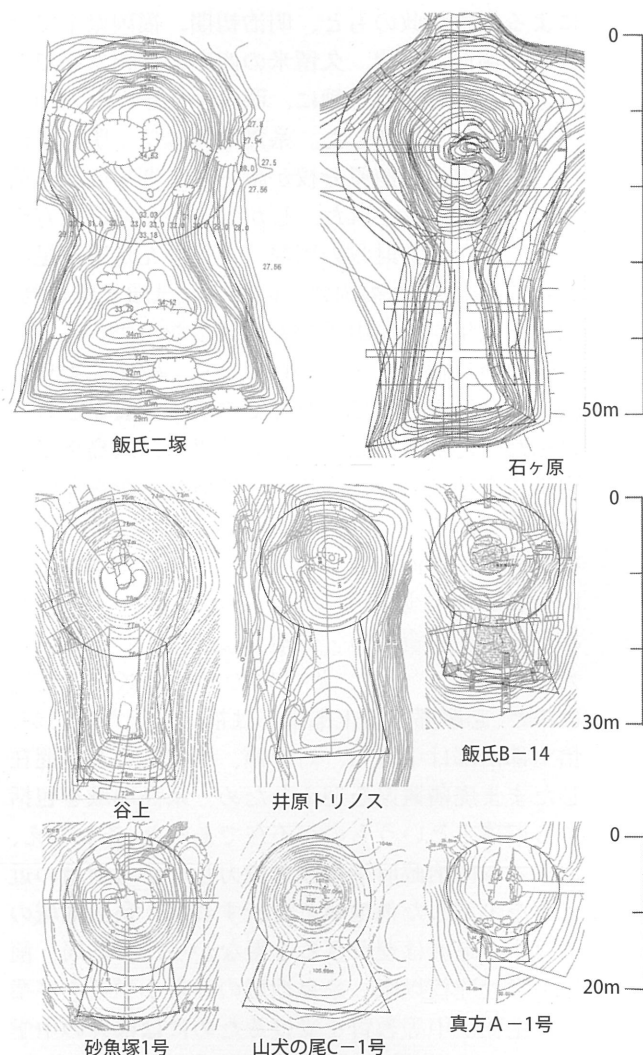
これらの古墳は、墳丘長は20～40mとばらつきはあるものの、後円部の径が概ね20m前後に収まっており、地域大首長墳と考えられる飯氏二塚、元岡石ヶ原古墳の規模とは一線を画している。築造時期は6世紀中葉頃に集中し、群集墳形成の初期段階に構築されているものが多い。

また、谷上古墳、飯氏B-14号墳、砂魚塚古墳から出土した副葬品の内容は他の古墳との間に明確な階層差を認めうるほどの隔差を有しない点も特徴であろう。

これら一定の規格制限の下に築造された小型前方後円墳出現の背景には、当該期の地域社会構造の変化が垣間見れるようで興味深い。

註

1. 『西堂・井原の文化財1』1995年 前原市教育委員会
『西堂・井原の文化財2』1996年 前原市教育委員会
2. 「井原トリノス古墳群」『糸島の古墳－前方後円墳および関連資料の集成－』2001 第27回九州古墳時代研究会 九州国立博物館誘致推進本部
『谷上古墳』1997 福岡市教育委員会
『飯氏古墳群B群第14号古墳調査報告書(2)』1999 福岡市教育委員会
「石ヶ原古墳」『元岡・桑原遺跡群5』2001 福岡市教育委員会
「山犬の尾C-5号墳の測量調査」『伊都国歴史博物館紀要9』2014 伊都国歴史博物館



第4図 糸島地方の後期前方後円墳比較（1/1,000 各報告書から加筆転載）